

## 第一章 明石の物語 母子の雪の別れ

[第一段 明石、姫君の養女問題に苦慮する]

冬になりゆくままに、川づらの住まひ、いとど心細さまさりて、うはの空なる心地のみしつ明かし暮らすを、君も(きみも、光君も)、「なほ、かくては、え過ぐさじ(やはり、このままこの山里では、とても暮らしては行けないだろう)。かの、近き所に思ひ立ちね(前から言っている、東院に引越す事にしなさい)」と、すすめたまへど、

「\*つらき所多く\*心見果てむも(見下げられて辛い目に遭う事ばかりで身の程を思い知らされるので)、残りなき心地すべきを(情け無い気持ちになるに違いないものを)、\*いかに言ひてか(どう言えば良いのか言葉になりません)」などいふ\*やうに思ひ乱れたり(などと言う言い方をして明石君は思い悩んでいました)。 \*「つらき所多く」は注に<「宿変へて待つにも見えずなりぬればつらき所の多くもあるかな」(後撰集恋三、七〇五、読人しらず)を引歌とする。>とある。引歌の背景が分からないので「宿変へて」が「つらき所」に掛かる妙味は味わえ無いが、都合の良さそうな所へ引っ越したのに会えなくて辛い、という筋は明石君の事情に似ている。ただ、引歌の「まつにもみえず」は「松にも見えず」で「蔓木(つらき)」の<藤>の風情を詠んだ洒落だとすると、その軽さは明石君の深刻さとは似合わない。とはいえ確かに、遠くに居て偶にしか会えないよりは、近くに居るのに偶にしか会いに来ない方が、相手のつれなさを強く感じるのかもしれない。増して他の女の所に通うのを間近で見せ付けられては、居た堪れなくも成るかも知れない。そうだとすると明石君がより傷付くのは、其れも是も自分が田舎者の所為だと思ってしまう劣等感、とは裏返せば権力志向にある、ようなことが明石君および入道家が大堰を選んだ理由として「松風」巻に記されていた。其処まで汲んで置く。 \*「心見果つ」の語用だが、「心」は<思い、気持ち、判断>で「見果つ」は<見終わる、残らず見る>だから、<最終判断>の意味かと思うが「果つ」の諦観語感を汲んで<思い知る>とした。 \*「いかに言ひて」は注に<「恨みての後さへ人のつらからばいかに言ひてか音をも泣かまし」(拾遺集恋五、九八五、読人しらず)を引歌とする。>とある。引歌の背景は分からないが、「浦見(海を見る)」に掛けてあるので京から海辺に左遷された者の悲哀かと思ったが、「拾遺和歌集」の分類に「恋歌」と示されているので旅行中の慕情歌なのだろう。此処の「恨み」は<憎しみ>ではなく<未練>のようだ。「ねをなく」は「音を鳴く(声を上げて泣く)」と「根を無く(当ても無く)」。通せば、「うらみでの(未練を断とうと海を見に来たが)のちさへひとの(貴方が諦めきれず)つらからば(辛いので)いかに言ひてか(何を言うにも言葉にならず)ねをもなかまし(出るのは泣き声ばかりで私は当ても無く更に彷徨うのだろう)」ということで、「いかに言ひてか」は<何を言うにも言葉にならない>と知れる。 \*「いふやうに」は<言うように>で良さそうだが、せっかく明石君の台詞を口語括弧に校訂してあるし、というか作者が古歌引用した表現にしてあるので、「やう(様、形、方法)」に少し拘って<そう言う言い方をして>とした方が明石君の人物描写になる気がする。

「さらば、この若君を(それでは、この姫を我が邸にお連れ申したい)。かくてのみは(こうした状態のままでは)、便なきことなり(都合が悪いのです)。\*思ふ心あれば(いずれは姫の入内をと私は考えておりますので)、かたじけなし(其相応のお世話を申し上げないと相済みません)。\*「思ふ心あれば」は逐語で<考えがあるので>だが、光君の立場で明石君の立場に申し入れる<姫の今後についての考える事>と云えば「入内」以外に無い。それが当事者には明確に分かり、その事の重大さゆえに明言を避けるこの言い方に説得力があるのだろうが、聞での睦言の秘匿と社会構造の違いからして、今の言葉としては「入内」を明言

して言い換えておかなければ説得力が無い気がする。尤も注にはく将来、入内させ立后させようという考え。「かたじけなし」が使われるゆえん。>とあり、敢えて逐語の置き換えに留めるのも見識とは思ふ。

対に聞き置きて(対の君に於いても話は承知して)、常にゆかしがるを(姫にずっと会いたがっていますので)、しばし見ならはさせて(少し懐けさせてから)、袴着の事なども、人知れぬさまならず(我が姫のお披露目の場として)しなさむとなむ思ふ(執り行なおうと考えています)」と(と光君は)、まめやかに語りたまふ(真剣にお話なさいます)。

「さ思すらむ(殿はそのようにお考えなのだろう)」と\*思ひわたることなれば(と思ひ及んでいた事なので)、いとど胸つぶれぬ(明石君は遂にその時が来たかと重く受け止め動揺しました)。\*「思ひわたる」はく思ひ続ける>の意味にもなるようだが、此処ではく考えてみれば思い至る>ということだろう。先ず「入内」自体は、出産直後に光君が宣旨の娘を若君の乳母に派遣してきた事から、光君が当初から考えていた事は分かっていた。いや、光君と出会う前から明石入道は中央権力を志向していて、明石君を光君に引き合わせた時から関係当事者は全員がく姫君の入内>を念頭に置いていた。だから、今更く思い至る>事柄と言え、明石君と若君の引き裂きであり、それは明石君が東院への移住を拒む事の必然として、我ながらく思い至る>所だったので。ただ、明石君としては東院移住拒否は自分の我儘という認識は無さそう。自分が娘とともに東院へ移住しても、必ず娘の教育は正妻である紫君の管理下で施されることになる。二条院の正式な姫君としての体面としても、中央貴族たる資質を身に付けさせる実質に於いても、である。つまり明石君が田舎者の悲哀を味わう事になるのは、可能性ではなく既定の構造なので、東院移住拒否は不用な軋轢を避ける合理的な結論なのである。それでも、やはり娘との別れは辛い、とは泣かせ所の名場面かもしれない。

「改めてやむごとなき方にもてなされたまふとも(大臣家の姫としてお披露目されて改めて高貴な方と持て成されなさろうとも)、人の漏り聞かむことは(世間が私のような卑しい者の腹と漏れ聞いて見下そうとするのは)、なかなかや(いろいろと手を尽くしても)、つくろひがたく思されむ(防ぎ切れないのではないかと思われます)」

とて(と言って明石君は)、放ちがたく思ひたる(若君を手放しがたく思うのは)、ことわりにはあれど(無理の無い事ではあったが)、

「うしろやすからぬ方にやなどは(対を信用できない方ではないかなどとは)、な疑ひたまひそ(決して疑いなさいませ)。かしこには(かの君に於いては)、年経ぬれど(何年も一緒に暮らしてきたが)、かかる人もなきが(子を儲けていないので)、さうざうしくおぼゆるままに(物足りなく思っは)、前齋宮の(さきのさいぐうの)おとなびものしたまふをだにこそ(年をとって成人なさった人にでさえ)、あながちに扱ひきこゆめれば(どうしてもお世話申そうと為さるので)、まして、かく憎みがたげなめるほどを(このような愛らしい年頃の姫を)、おろかには見放つまじき心ばへに(いい加減に放り出したりしない人柄ですから)」

など(などと光君は)、女君の御ありさまの\*思ふやうなることも語りたまふ(夫人の御人格が望ましい事もお話しになって御帰りなさいます)。 \*「思ふやう」はく望ましい様子、理想的な姿>。

「げに、いにしへは(本当に昔は)、いかばかりのことに(どういった形に)定まりたまふべきにかと(落ち着きなさるものかと)、つてにもほの聞こえし御心の(明石の田舎まで人伝にも噂に聞

こえた浮気性でいらした殿が)、名残なく静まりたまへるは(すっかり収まって二条院で御暮らしになって御出でなのは)、\*おぼろけの御宿世にもあらず(あやふやなご縁でもなく)、人の御ありさまも(奥様のお人柄も)、ここの御なかに(殿のお相手の中でも)すぐれたまへるにこそは(優れていらっしゃればこそなのだろう)」と思ひやられて(と明石君には思い遣られて)、 \*「おぼろけ」は<(下に打消し語を伴って)並大抵の>または<(打消し語を伴わないで)並大抵ではない>の意味になる、と古語辞典に説明されている。つまり、「おぼろけ」を含む文は<並大抵の～ではない>ということになるらしい。奇妙で分かり難い語用の形容動詞だ。だとしても、この文の場合は<並大抵のご縁でも無く>となるわけだが、<並大抵の御縁>とは如何にも熟なれていない表現で、敢えて態といひ方としてなら使えるが、平易な文には馴染まないいひ方になってしまう。かといって、この文に<ぼんやりとした御縁>も馴染まないから、「おぼろけ」が今の「おぼろげ(臆気、ぼんやりとしてはっきりしない)」とは違う事は分かる。それでも「おぼろ」の語感には共通の<大らかな、大雑把に、大まかに見て>の意味はありそうだ。いや寧ろ、「並」は「波」の語感なので「おぼろけ」の説明には似合わない気がする。だから<約その>線で「御宿世」に馴染む「おぼろけ」を考えて、<並大抵>よりは<ぼんやり>寄りの<あやふや>を採用した。

「数ならぬ人の(上流社会では物の数にも入らない卑しい家柄の者が)並びきこゆべき\*おぼえにもあらぬを(中央貴族に名を連らねられるとは世間は考えてもいないのに)、さすがに(若君がそのように)、立ち出でて(大臣家の姫として名乗り出たら)、人もめざましと思ふことやあらむ(宮廷人は呆れるのかもしれないが、)。わが身は(既に家柄評価が定まった私自身は)、とてもかくても同じこと(いまさら何をしても変わりようが無い、ものの、)。生ひ先遠き人の御うへも(未だ将来の定まらない姫の御世評は)、つひには(託してしまえば結局は)、かの御心にかかるべきにこそあめれ(かの二条院の奥様の御育て方次第ということになるだろう)。さりとならば(そうであるならば)、げにかう何心なきほどにや譲りきこえまし(なるほどこのように物心付く前の内に譲り申し上げたほうが良い)」と思ふ(と思ひます)。 \*「おぼえ」は<世評>。

また(その一方で明石君は)、「手を放ちて(姫を手放して)、うしろめたからむこと(気掛かりになるだろうことや、)。つれづれも慰む方なくては(成長を見守る楽しみを失っては)、いかが明かし暮らすべからむ(どうして毎日を暮らしていけばいいのだろう)。何につけてか(姫がいなくなったこの山荘に殿は何かの御用で)、たまさかの御立ち寄りもあらむ(少しでもお立ち寄りなさるのだろうか)」など、さまざまに思ひ乱るるに、身の憂きこと(立場の辛さは)、限りなし(この上もありません)。

## [第二段 尼君、姫君を養女に出すことを勧める]

尼君、\*思ひやり深き人にて、 \*注にわざわざ<「思ひやり」は思慮の意。>とあるが、その意味で使う事が良くあるとしても、此処では寧ろ<同情>ないし文字通りの<思い遣り、気遣い>なのだろう。愛しい我が娘が孫と別れる時に、理詰めで話すことは確かにあるだろうが、それは説明ではなく共感して慰めるための確認に違いない。止むを得ない事情は明石君も十分に分かっていて、それだけに悲しいのだから。

「\*あぢきなし(仕方ありません)。 \*「あぢきなし」は語感から<味気ない>を想起するし、その意味で使われる事もあったと思うが、此処では本来の接頭語の「あ」に「付きなし(合致しない、理屈に合わない)」の意味で<

それは合理的ではない>ということだろう。ただし、尼君は明石君の非論理性を非難する気持ちではなく、同情ないし共感を表しているのだからそれは合理的ではない→言っても如何なるものでも無い→仕方が無い>となる。

見たてまつらざらむことは(若君とお会い出来なくなる事は)、いと胸いたかりぬべけれど(とても胸が痛むでしょうが)、つひにこの御ためによかるべからむことをこそ思はめ(結局は若君の御為に成る事を考え為さい)。浅く思してのたまふことにはあらず(殿は浅慮から仰っているのではありますまい)。ただうち頼みきこえて(偏に對の君を御信賴申し上げて)、渡したてまつりたまひてよ(若君をお渡し申しなされよ)。

母方からこそ(母方の身分に拠ってこそ)、帝の御子も際々におはすめれ(親王の品位もそれぞれ差がありなさるようです)。この大臣の君の(光君が)、世に二つなき御ありさまながら(世に二人とない優れた御姿でありながら)、世に仕へたまふは(弟宮の朝廷に御仕えなさっているのは)、\*故大納言の(母方の御祖父上の故大納言が)、今ひときざみなり劣りたまひて(あと一位階大臣職に届きなされずに)、更衣腹と言はれたまひし(御母上が妃に相応しい女御の御位に御就きに成れずに更衣腹と言われなされた)、\*けぢめにこそはおはすめれ(身分違いにこそで御座いましょう)。\*「故大納言」は注に<源氏の母桐壺更衣の父、按察使大納言をさす。>とある。\*「けぢめ」は<相違、区別、境目、区切り、仕切り>と大辞泉にある。

まして(そのように大納言家の姫君でさえ後宮では一段低い妃の更衣として見下されなされたのに、まして)、ただ人は(ただうどは、中央貴族でも無いただの受領家に過ぎない我が家柄では)なずらふべきことにもあらず(若君を妃の列に並べ申す事さへ出来ません)。

また(それにまた)、\*親王たち、大臣の御腹といへど(みこたちおとどのおんはらといへど、親王家や大臣家の若君といへど)、なほ\*さし向かひたる劣りの所には(本宅からは実際に手当ての劣る妾宅の娘では)、人も思ひ落とし(世間も見下して)、親の御もてなしも(父親の御養育ぶりも)、え等しからぬものなり(とても同じにはならないものです)。\*「親王たち」については、注に<母親が親王方や大臣の娘と言っても。明石の君の場合は播磨国司の娘。>とある。納得しがたい注釈だ。多分、この注は「御腹」を<女腹>の「女」に拘って読んでいるのだろう。しかし先ず読むべきは、この文が何について如何言っているかという大意である。尼君が此処で一般論を語る意義は無いので、この文は明石君腹の若君についてその立場を確認している、に違いない。そして父親の光君は内大臣なので、若君を「大臣の御腹」と言ったのだろう。だから文意は<明石君腹の若君は大臣家の御子ではあっても>である。「親王たち」については、光君は臣籍降下していなければ「親王」なので<もし仮に光君が兄弟宮のように親王だとしても>という「大臣」に掛かる一種の枕詞に近い言い回しで、意味は<親王家の御子であっても>であろう。\*「さし向かひたる」は「劣りの所」を修辭している。「劣りの所」は、「劣り腹(おとりばら)」が古語辞典に<他に比較して、身分の劣った母が生んだ子。妾腹の子。>とあるので、文意からしても明石君および其の住処と見ていいだろう。「差し向かふ」は<差し当たっての=現況での、実際に、実質で>で、「なほ」は<まして、さらに、～より>などの比較低位を示す副詞だから、文意は<本宅より実際に教育費が少ない妾宅>だ。

まして(その上)、これは(この若君は)、やむごとなき御方々にかかる人(身分の高い他の妻妾の御方々に御子たちが)、出でものしたまはば(お生まれになったら)、こよなく消たれたまひなむ(すっかり忘れ去られてしまうでしょう)。ほどほどにつけて(身分身分に応じた御子たちの養

育とはいえ)、親にもひとふしもてかしづかれぬる人こそ(父親にも特に関心を持ってお世話いただける人こそ)、やがて落としめられぬはじめとはなれ(何かあっても蔑ろにされずに済む最初の条件とは成るでしょう)。

御袴着のほども(御袴着の祝儀も)、いみじき心を尽くすとも(どんなに気持ちを込めても)、かかる(このような)深山隠れ(みやまがくれ、山深い目立たない所)にては、何の栄か(はえか、嬉しい栄誉も)あらむ(ありません)。ただ任せきこえたまひて(偏に殿にお任せ申し上げ為さって)、もてなしきこえたまはむありさまをも(お祝い下さる式次第についても)、聞きたまへ(口出しせずにお聞き入れなさい)」

と教ふ(と諭します)。

\*さかしき人の心の占どもにも(信頼できる女房たちの助言にも)、\*もの問はせなどするにも(改めて易者に占わせたりしてみても)、なほ「渡りたまひてはまさるべし(姫君は二条院に行かれた方が未来が開けるでしょう)」とのみ言へば、思ひ弱りにたり(明石君は気弱になりました)。\*「賢しき人」は<優れた判断を下せる人>なのだろうが、占いを専門とする呪術者や易学者や陰陽師などではなさそう。というのも、「心の占(こころのうら)」が<心の中で未来を推察すること。推量。予想。>と古語辞典にあり、「賢しき人」は論理様式や計算式に基づく予言ではなく、経験や宮廷事情に通じた予測に基づく助言をしたようだから、「学識者」よりも「信頼できる女房」かと思う。\*「ものとはせ」の「もの」は「心の占」の「占」を「にも」の列挙構文で<物々しく受けて>、改めて専門家に易を「とはせ」という文体のようだ。意外な難解さに驚く。

殿も、しか思しながら(そうしようと御思いに為りながら)、思はむところのいとほしさに(明石君の気持ちが労しくて)、しひてもえのたまはで(姫の譲り受けをまともにはとても仰れずに)、

「御袴着のことは、いかやうにか(どうしましょうか)」

とのたまへる御返りに(と差し出しなされたお手紙のお返事に明石君は)、

「よろづのこと(何事も)、かひなき身に\*たぐへきこえては(ふがないこの身と共に暮らして御出ででは)、げに生ひ先もいとほしかるべくおぼえはべるを(まことに姫の将来が危ぶまれなされると存じますものの)、たち交じりても(二条院の貴人の中に入ったとしたら)、いかに人笑へにや(どれほど笑い者にされるかと案じられます)」 \*「たぐふ」は<同類に並ぶ>の語幹で<一緒にいる>。

と聞こえたるを(と申してきたのを)、いとどあはれに思す(ますます可哀相にお思いです)。

日など取らせたまひて(殿は若君のお移りになる日取りを御決めになって)、忍びやかに(内々の事として良く事情を知る者に)、さるべきことなどのたまひおきて(そのための準備を指示なされて)させたまふ(用意させなさいます)。

放ちきこえむことは(若君を手放し申すことは)、なほいとあはれにおぼゆれど(やはりとてもつらく思われたが)、「君の御ためによかるべきことをこそは(姫の御為に良い事をするこそ

が母親の務め)」と\*念ず(と悲しみを堪えて、)。 \*「念ず」は<心に祈る>または<こらえる、がまんする>と古語辞典にある。

「乳母をもひき別れなむこと(乳母とも別れることになって)。明け暮れのもの思はしき(日々の気の滅入りや)、つれづれをもうち語らひて(遣る瀬無さをふと話して)、慰めならひつるに(慰めとしてきたのに)、いとどたつきなきことさへ取り添へ(そんな話し相手まで失うことになってますます頼りなくなるのは)、いみじくおぼゆべきこと(本当に厭です)」と、君も泣く(明石君は泣きます)。

乳母も、

「さるべきにや(そういうことになるのでしょうか)、おぼえぬさまにて(思いがけないかたちで)、見たてまつりそめて(お目にかかり始めて)、年ごろの御心ばへの(長年の御親切が)、忘れがたう恋しう\*おぼえたまふべきを(忘れ難く恋しく思われて為りませんものを)、うち絶えきこゆることはよもはべらじ(別れたとしてもお手紙を差し上げない事は決して致しません)。 \*「おぼえたまふべき」を、明石君が「おぼゆ」ことの敬語表現としての「たまふ」と読む訳文があるようだが、同意出来ない。「御心ばへ」こそが明石君の<御親切>なのだから、それを「忘れがたう恋しう」「おぼゆ(感じる)」のは宣旨の娘に決まっている。「たまふ」は会話でのみ使われる<自己の動作に添えて話し相手に対する謙譲の意を示す丁寧語>で、「おぼえたまふ」の逐語は<思われ致す>だろう。「べき」は<推量、可能、当然、決意、命令>の助動詞「べし」の連体形で、此处では<当然>。

つひにはと頼みながら(いつまでもご一緒と信じきっていたので)、しばしにても(少しの間でも)、よそよそに(離れ離れになって)、思ひのほかの\*交じらひ(思いがけない宮仕えを)しはべらむが(致す事になるのが)、安からずもはべるべきかな(落ち着かなく存じられます)」 \*「交じらひ」は<交際>の他に<宮仕え>とある。内大臣家に勤める事になるので、広義の「宮仕え」とは言えるのかも知れない。大臣の給料は衣食住について、使用人何人分と計算されるらしい。

など、うち泣きつつ過ぐすほどに(泣き泣き日を過ごしている内に)、師走にもなりぬ(十二月にもなりました)。

[第三段 明石と乳母、和歌を唱和]

雪、霰がちに(この年末の雪あられがちの日々に心に寒さが積もるように)、心細さまさりて(明石君は心細さが募って)、「あやしくさまさまに(何だか色々)、もの思ふべかりける身かな(不安に駆られて滅入ります)」と、うち嘆きて(悲しんで)、常よりも(いつもよりも)この君を撫でつくろひつつ見みたり(若君を撫で揃えながら慈しんでいました)。

雪かきくらし降りつもる朝(雪が空一面を暗くして降り積もるある朝に)、来し方行く末のこと、残らず思ひつづけて、例は殊に(れいはことに、平素は特には)端近なる(はしちかなる、縁側近くに)出で居などもせぬを(座している事はしないのに)、汀の氷など見やりて(君は戸口から庭の池の水際の氷などに目を遣って)、白き衣どものなよよかなるあまた着て(白い着物の柔らかい物を何枚も着て)、眺めみたる様体(やうだい、姿勢)、頭つき(かしらつき、髪形)、うしろで(後ろ

姿)など、「限りなき人と聞こゆとも(最上位の貴婦人と言えども)、かうこそはおはすらめ(これほど優美ではないだろう)」と人びとも見る(と女房たちも思います)。

落つる涙をかき払ひて、「\*かやうならむ日(離れた後でこんな日があると)、まして(寂しさも増して)いかにおぼつかなからむ(どんなに頼りなく思う事でしょう)」と、らうたげにうち嘆きて(明石君は乳母に親しみを込めて別れを惜しんで)、 \*注に<明石の心中。姫君を手放した後の寂寥感を思う。>とある。確かに「かやうならむ日」の「らむ」は、「日」という時系列に掛かる<假定助動詞>なので<未来推量>となる。ただ、そうは言っても「らむ」を<～ような>という曖昧表現に言い換えても、今でも特に会話では「このような日」や「こんな日」という言い方で過去・現在・未来を含ませることが出来るので、その限りでは現代語の方が古語以上に厳密さに欠けるようにも見える。しかし、会話文の曖昧さは言葉だけを取り出した見かけ上のもので、その場の状況下で当事者間では特定の物や事柄が共通認識されている事と、それを前提にしながらも斯かる言い方が為された人間関係を、第三者は臨場感を持って理解しなければならない。それに現代の会話でも必ずしも曖昧表現を取るとは限らず、古文に主語を補う言い換えが必須の場合が多い事を思えば、文意に沿って補語してこそ古文の現代語への言い換えに適當するだろう。

「雪深み深山の道は晴れずとも、なほ文かよへ跡絶えずして」(和歌 19-01)

「せめて便りの足音を、雪に埋もれた静けさに」(意識 19-01)

\*注に<明石の君から乳母への歌。「文」と「踏み」の掛詞。「雪」と「晴」、「踏み」と「跡」は縁語。手紙を通わすよう願望。>とある。この歌の筋は「晴れずとも文かよへ」で、他意は無さそうだ。この筋にどう情緒を盛り込むかを工夫したのだろう。「ゆきふかみ」は「雪深み(雪が積もって)」と「行き深み(遠く離れた)」の複意で「みやま」に掛かる。「みやま」は「深山」で良さそうだ。「晴る」は<広々する>で「道は晴る」が<行き来が出来る>となって、「跡絶ゆ」の<往来が絶える>に対照する。そして、それぞれを「ずとも(でなくても)」「ずして(でなくないように)」と打ち消しあう。

とのたまへば、乳母、うち泣きて、

「雪間なき吉野の山を訪ねても、心のかよふ跡絶えめやは」(和歌 19-02)

「どんなに深い山奥も、必ずお訪ね致します」(意識 19-02)

\*注に<乳母から明石の君への唱和歌。「雪」「通ふ」「跡」を引用し、「深山」は「吉野の山」、「文通へ」は「心の通ふ」、「跡絶えずして」は「跡絶えめやは」と言い換えて、明石君の気持ちに答える。>とある。「雪間」は<1. 雪が降りやんでいる時。雪の晴れ間。><2. 積もった雪のところどころ消えた所。><3. 雪の降っている中。雪の降り積もった中。>とあって、此处では「雪間なき吉野の山」なので<雪の降り止む事のない吉野の山→雪深い吉野山>と読めば、初歌の「雪深み」に呼応する。また「ゆきま」は「行き間」であり、「行き間なき」は<道無き→遠く離れた>として複意も呼応する。「吉野山」は桜の名所で、私などは冬の厳しさの印象は無いが、修験僧の根本道場たる金峯山寺(きんぷせんじ)があり、山岳信仰と仏心修行が結びついた霊山であるらしい。歌の筋は「山を訪ねても(困難を乗り越えてでも)」「跡絶えめやは(音信を絶やすような事は)」「よもせまじ(よもや致しません)」で、「よもせまじ」は「めやは」の反語用法で省略されている、ということのようだ。「めやは」の「め」は未来助詞「む」の假定形で、「やは」は<～のようには、～しない>。

と言ひ慰む。

[第四段 明石の母子の雪の別れ]

\*この雪すこし解けて渡りたまへり(この数日後の雪が解けた日に殿が若君を迎えに大堰山荘に御出でなさいました)。\*注に<雪が少し解けたころに、源氏が姫君を迎えに大堰山荘を訪問する。>とある。こういう主語省略文にはいつまでも慣れない。流れで読み進んでくると、この文は<若君が二条院に移った>のかと思ってしまう。しかし字面だけでなく物事の推移を考えて読めば、若君が移る日には光君が迎えに来るものだということが理解できる。そして、この事の運びが「忍びやかに」という言い方で当時の読者には示されていたのかも知れない、と今更に思う。ということは、夕方の目立たない時間だろうか。

例は待ちきこゆるに(いつもなら待ち遠しく思い申上げる殿のお越しに)、さならむとおぼゆることにより(若君と別れる事になると思わずにはいられない事によって)、胸うちつぶれて(明石君は暗澹たる思いで)、\*人やりならず、おぼゆ(自分を責めずには居られません)。\*「人遣り」は<他人の所為にする>で、「他人遣りならず」は<他人の所為に出来ない>だろうか。「他人遣りならず思ゆ」は<他人の所為には出来ないと思う>ので、<自分を責めずには居られない>のだと思う。

「わが心にこそあらめ(私が姫の譲り渡しを受け入れたからこそこんな事になってしまったのだろう)。いなびきこえむをしひてやは(お断り申し上げていたら殿は強いてとは、仰らなかつただろう)、あぢきな(愚かな事をしてしまった)」とおぼゆれど(と思わずには居られなかつたが)、\*「軽々しきやうなり(でもそれは安易な母心に過ぎない)」と、せめて思ひ返す(やっと思ひ直します)。\*「かるがるし」は分かり難い。古語辞典には<値打ちが無い><軽率だ、考えが浅い>という現代語と同じ意味の他に<身分が低い>ともある。一見したところでは、今の「おぼゆ」が「軽々しき」なのだから<考えが浅い>で良さそうだが、それでは「やうなり(～のようになってしまう)」が奇怪しい。寧ろ構文上は「軽々しき」だからではなく、「やうなり」なので「思ひ返す」というわけだ。で、明石君の意識である。やはり明石君は<地方官の家柄で身分が低い>ことに強い劣等感を抱いている。いや、それは単に劣等感という感性の問題ではなく、社会構造上の認識である。つまり明石君は<いかにも田舎者らしい事>は出来ない、のだ。とはいえ、「軽々しきやう」を<田舎者丸出しで>とは文格上で解せ無い。「文格」とは内大臣を迎えているこの場面の格式である。で、明石君の反省は<今の自分の思いは入内を控えた姫ではなく普通の子の母親の気持ちに過ぎない>となって、要せば<安易な考え>となるのだろう。で結局、<考えが浅い>でも然程遠くは無さそうだが、とは意外なオチだった。

いとうつくしげにて(とても可愛らしく)、\*前にみたまへるを見たまふに(明石君の前に座っていらっしゃる若君をご覧になって殿は)、「\*おろかには思ひがたかりける人の宿世かな(この姫の見事さは決して浅いとは思えないこの君との縁の現れに違いない)」と思ほす(とお思いになります)。\*「前」は注に<「前」は明石の君の前。「見たまふ」の主語は源氏。>とある。場面描写がないので分かり難いが、後の「のたまひ明かす」に繋がる文節なので、一連の母屋の場面ということだろう。\*注に<源氏の心中。姫君を見て、明石の君との宿縁の深さを思う。>とある。是も「のたまひ明かす」に繋がる。

この春より生ふす御髪(おふすみぐし、伸ばしている髪の毛の長さは)、\*尼削ぎのほどにて(尼削ぎのように肩に掛かって)、ゆらゆらとめでたく(揺れて美しく)、つらつき(顔立ちも)、まみの薫れるほどなど(目元の麗しさなど)、言へばさらなり(言い出せば切りもない見事さです)。\*「尼

削ぎ」は大辞泉に< 1. 尼になった女性が、髪を首か肩の辺りで切りそろえること。そぎあま。>とあり< 2. 昔の女兒の髪形の一。尼のように髪を首か肩の辺りで切りそろえたもの。>とある。

よそのものに\*思ひやらむほどの\*心の闇(そんな可愛い若君を他家のものとして離れて気遣って行くことになる明石君の親心を)、推し量りたまふに(殿は推し量りなさっては)、いと心苦しければ(実に気の毒で)、うち返しのたまひ明かす(繰り返し慰め言を仰って夜を明かしました)。\*「思い遣る」は幅のある言葉だが、此处では< 遠く離れて思う>。 \*「心の闇」は、結果である子供の幸せばかりを願うあまりに客観的な価値判断が下せず的確な指導が出来ないという暗愚な親心や、身最良で目が暗む親馬鹿という印象もあるが、此处では特に悪い意味は無しに子を案じる親心を言っている。

「\*何か(いえ、もうそれは)。かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば(姫をこのような粗末な身分の者としてではなくさえ御育て下されますなら、何かはあらん)」 \*「何か」はそれだけで< いえいえ、いいえ>という打消しの慣用句だが、この文ではその原型かと思える倒置強調が分かり易い。

と聞こゆるものから(と申しながらも)、念じあへずうち泣くけはひ(明石君は堪え切れずに泣き出しそうで)、\*あはれなり(同情を誘う痛ましさです)。 \*注に< 語り手の評。『完訳』は「人の胸をうつ痛ましさである」と訳す。>とある。

\*姫君は、何心もなく(無邪気に)、御車に乗らむことを急ぎたまふ(御車に乗って行く事を楽しみに為さいます)。 \*注に< 母親の心痛と姫君の無邪気さを対比、連続して語るが、場面は翌日に移る。>とある。本当に分かり難い。朝が晴れたのか曇ったのか、「何心もなく」とあるから晴れたのだろうか。どちらにしても場面を盛り上げる情景描写は出来るだろうに、こういう説得力の無い筆運びは既に何度もあるが、妙に説得力のある場面描写も時にはあるので、その落差に驚く。長文は要らない、ほんの数語足りない。

\*寄せたる所に(御車を寄せた門口まで)、母君みづから抱きて出でたまへり(母君ご自身が抱いて若君が出て御出でに成りました)。 \*注に< 母君自ら姫君を抱くのは特別。普段は乳母などが抱く。「出でたまへり」と敬語表現がある。母子別れの場面の圧巻。>とある。そうかもしれないが、そうだとすれば「出で給へり」は大袈裟な丁寧語表現なのだろう。ただ、「出でたまへり」の主語が若君に代わっているという読み方も出来そう。一文中で動作主体が変わるという書き方は以前にも何度かあったと思うし、その都度主語省略の分かり難さを痛感しながらも、場合によっては敬語表現で主語が分かって、今の文体には無い表現を味わう事もある。

片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、「乗りたまへ」と引くも、いみじうおぼえて(若君が片言の声もとても可愛らしく袖をつかんで「乗りましょう」と引くのも母君は堪らなく愛しく思えて)、

「末遠き二葉の松に引き別れ、いつか木高きかげを見るべき」(和歌 19-03)

「後は遠くで見守って、大きくなる日が楽しみです」(意訳 19-03)

\*注に< 明石の君の歌。「二葉の松」は姫君を譬喩。「松」と「引き」は子の日にちなむ縁語。将来立派に成長することを祈念する。>とある。「すゑとほき」は< 晩年が遠い→先の長い→成長が楽しみな>という意味で「いつか見るべき(いつになったら見る事が出来るのだろう)」に掛かるが、同時に< 行く先が遠い>の意味で「引き別れ(互いに

分かれて)」にも掛かる。「ふたば」は<幼芽>で<幼児>を例える。「松」は寿命の長い大木で祝言に相応しい。「こだかきかげ」は「松」を受けた表現で<大きく成長した姿>と子供の成長を例えるが、今後は自らの手を離れて「かげを見る」だけだという悲哀が滲む。

えも言ひやらず(とさえも言い切れずに)、いみじう泣けば(嗚咽したので)、「さりや(そうだろう、無理も無い)。あな苦し(ああ堪らない)」と思して(と殿もお思いになって)、

「生ひそめし根も深ければ、武隈の松に小松の千代をならべむ (和歌 19-04)

「一緒に作った幸せを、私はずっと忘れない (意識 19-04)

\*注に<源氏の返歌。「武隈の松」は明石の君を、「小松」は姫君を喩える。「いつか一見るべき」という明石の君の問いに対して、「武隈の松」に「小松の千代」を「並べむ」と応える。>とある。「武隈の松」は歌枕で<宮城県岩沼市の竹駒寺付近にあった松。>と大辞泉にある。Web 検索すると [www.bashouan.com](http://www.bashouan.com) の「武隈の松」のページに写真入の取材があった。現在の木は8代目とあるが、2本の松が並んでいるように見えるほど根元近くで2本の幹に別れた同根の松を特徴とするらしい。8代目というのは、その特徴ある姿にする為に若木に挿し木して作る、名物のまた観光名所としての伝統なのだろう。相生の松とは別物かもしれない。また、この作為が邪道では無いことが古歌を紐解いて同ページに解説されているが、この点に関しては「宮城の歌枕」Web サイトが更に詳しく、以下準拠したい。即ち、「武隈の松」は後撰和歌集(951年、1425首。村上天皇期の勅撰和歌集)に取り上げられた藤原元良の「うゑし時ちぎりやしけむ たけくまの松をふたたびあひ見つるかな」を初出とする。ところで、この歌は詞書に「陸奥の守にまかり下りけるに武隈の松の枯れて侍りけるをみて小松を植ゑつがせ侍りて任果てて後又おなじ国にまかりなりて かの先の任に植ゑし松を見侍り見て」としてある。つまり元良は<以前枯れ木に小松を接木したことが再赴任する事になった縁だったのかな、こうして育ったところを見ると意外に根が深かったのかも知れないな>と現世の巡り合わせの妙に、感じ入ったか面白がったかした、ワケだ。そして光君はこの元良の歌を丸々下敷きになっている、ワケだ。元良は<小松を接木したから再赴任した>のだから、光君は<姫を移し変えるからこそ明石君に再訪する>と約束できる、という言い方で明石君を説得する。なぜなら「根も深ければ」と光君は言うのだが、是を<縁が深いから>で明石君は納得するだろうか。此处で「生ひ初めし(姫を生まれさせた)」が効いてくる。「おひそめし根」は光君の男根である。「深ければ」は<深く感じたので→気持ち良かったから→明石君の体は具合が良いから>光君は<再訪を約束できる>と言えば、明石君も納得できる。要するに「根」は<情>である。ただし、この物語で言う「情」とは、情緒ではなく性感、少なくともその感触を含む恋情であることは既に見てきた。同様の筋で「千代を並べむ」は、明石君に<またいつか姫に合わせるから>でもあり、<いつまでも私は会いに来るから>でもある。

\*のどかにを(どうか焦らずに、待っていて下さい)」と、慰めたまふ。 \*「のどか」は<穏やか、和やか、ゆっくりする>という形容動詞で、「に」はその中止法。「を」は強意だが、それが<どうか>か<どうぞ>で「のどか」の重さが違って来る。誘導なら<どうぞごゆっくり>だが、願望なら<どうか落ち着いて>だし、此处では時間の猶予を請うので<どうか焦らずに>とした。

\*さることとは思ひ静むれど(これも世の巡り合わせと明石君は因果を呑み込んだが)、えなむ堪へざりける(子別れの悲しみはとて抑え切れませんでした)。 \*「さること」はそれ自体で<然るべき事、尤もな事>という連語ないし慣用句になっているようだが、前の文の流れに沿って読み進む事も出来そうだ。

即ち、光君が元良の歌を引き合いに出して説いた、現世における因果が巡り合う論しを明石君が受け入れた、という筋である。

乳母の少将(めのとのせうしゃう)とて、あてやかなる人ばかり(という上品な女房だけが)、御佩刀(みはかし、護り刀と)、\*天児(あまがつ、厄除けの身代わり人形)やうの物(のようなまじない物を)取りて乗る(持って姫君の御車に同乗します)。\*「あまがつ」は<形代(かたしろ)として幼児のそばに置き、災厄を移し負わせる人形。>と大辞泉にある。語感では<てるてる坊主>か。

\*人だまひによろしき若人(御供の車には器量の良い若い女房や)、童女など乗せて、\*御送りに参らす(お見送りに随行させます)。\*「ひとだまひ」は「人給ひ」と表記されるようで<従者に貸し賜る牛車>を意味する、と古語辞典にある。\*「おんおくり」は注に<主語は明石の君。「す」使役の助動詞。自らは送りに行かない。>とある。「送り」は<見送り>で、目的地まで随行し、帰って経過報告をする、のだろう。

\*道すがら(二条院への帰り道で光君は)、とまりつる人の心苦しさを(大堰にとどまった明石君の胸の苦しさを)、「いかに(どれほど辛いだろう)。罪や得らむ(罪作りな事をした)」と思す(と御思いになります)。\*注に<場面、大堰から二条院への道中に移る。牛車の中の源氏。>とある。

#### [第五段 姫君、二条院へ到着]

\*暗うおはし着きて(日が暮れてから御一行はお着きになって)、御車寄するより(寝殿の階に御車を近付ければ)、はなやかにけはひことなるを(華やいだ雰囲気が別格で)、田舎びたる心地どもは(田舎暮らしをしてきた女房たちは)、「はしたなくてや\*交じらはむ(きまり悪くて勤まるだろうか)」と思ひつれど(思っていたが)、\*注に<二条院へ到着。場面、二条院の寝殿か。「暗く」なって到着。とすると、その出立は午後になってからか。>とある。なるほど、「おはし着き」は二条院の門口。そして、一行は中門を抜けて屋敷中央の寝殿階の御車寄せに向かう。すると外からは窺い知れなかった二条院の華やぎに包まれた。という描写か。\*「交じらふ」は単に「まじる(中に入る)」のではなく<交際する>とあり、その為に社会秩序の中で一定の役割を果たすのだから、この場合は<勤める>だろう。

\*西表をことにしつらはせたまひて(対の君は寝殿の西側の部屋を姫君のために用意していなさって)、小さき御調度ども(ちひさきみでうどども、子供用の道具入れなどを)、うつくしげに調へさせたまへり(可愛らしく揃えさせていらっしやいました)。\*注に<『集成』は「寝殿の西側であろう」。『完訳』は「西の対の西向きの座敷」と注す。西の対ならば南北に縦長。ここは東西に仕切っているから寝殿であろう。>とある。

乳母の局には(めのとのつぼねには、乳母の部屋としては)、西の渡殿の、北に当れるをせさせたまへり(北に面した曹司私室を使わせなさいます)。

若君は、道にて寝たまひにけり。抱き下ろされて、泣きなどはしたまはず。こなたにて御くだもの参りなどしたまへど(お部屋に入ってお菓子を召し上がったり為さったが)、やうやう見めぐらして(次第に辺りを見回して)、母君の見えぬをもとめて(母君の見当たらないのを探して)、らうたげにうちひそみたまへば(労しくべそ搔きなさるので)、乳母召し出でて(光君は乳母を御呼び出しなさって)、慰め紛らはしきこえたまふ(あやし付けさせなさいます)。

「山里のつれづれ(山里の寂しさは)、ましていかに(こんな愛らしい姫が居なくなってどれほど増す事だろう)」と思しやるはいとほしけれど(と明石君を気遣えば可哀相だったが)、明け暮れ思すさまにかしづきつつ(これから毎日思うようにお世話申し上げ)、見たまふは(姫の成長を見て行くのは)、\*ものあひたる心地したまふらむ(我が意を得た心持ちを光君はして御出でのようです)。\*「物合ふ」は「もの(特別な思い、思い入れ)」が「あふ(叶う)」で<念願成就>くらいの語感かと思うが、念願の「入内」自体は先の事なので、今の所はその足掛かりの緒に付いた、既定方針の路線に乗った一定の達成感ということで<意向に沿った→意を得た>とした。

「いかにぞや(それにしても、どういうことが)、人の思ふべき瑕なきことは(誰もが思うような不都合のないことなのか)、このわたりに出でおはせで(若君は此処の君腹にお生まれではないのだから、こうする他に仕方が無いではないか)」と、口惜しく思さる(ままならない因果を悔しがりなさいます)。

しばしは(しばらく姫君が)、人びともとめて泣きなどしたまひしかど(大堰の人びとを探して泣いたりしていなさった時に)、おほかた心やすく(何につけても気取らない親しさで)をかしき心ざまなれば、\*上に(明るく楽しい表情であった対の上に)いとよくつき睦びきこえたまへれば(姫がとても良く懐き申しなさったので)、\*注に<紫の上をいう。「蓬生」巻に「二条の上」「対の上」とあるが、並びの巻を除いては、初めての「上」の呼称。姫君を引き取って、養女として以後、「上」という呼称で待遇される。以下の巻でも「上」と呼称される。>とある。確かに、「若君」の主語省略と行き成りの「上」の呼称には、いささか面食らう。マ、今に始まった事じゃないが。それと、「心やすくをかしき心ざま」を姫に掛ける読み方は「かど」を見逃している。

「いみじうつくしきもの得たり(本当に可愛い子を授かった)」と思しけり(と対の上は御思いになりました)。こと事なく抱き扱ひ(対は特に不慣れな事も無く幼児を抱き扱い)、もてあそびきこえたまひて(あやしなさって)、乳母も(そんな気取らない対の上に乳母も)、おのづから近う仕うまつり馴れにけり(自然に親しく仕えるように成りました)。また、\*やむごとなき人の乳ある(王家筋で乳の出る女房が)、添へて参りたまふ(乳母に加わって御仕えなさいます)。\*注に<源氏は先の乳母の他に、もう一人、高貴な身分で乳の出る乳母を加えた。>とある。若君は数えて三歳だから、二年前の三月十六日生まれで今は十二月なので満で二歳九ヶ月。もう歯も生え揃って、離乳食どころか普通の食事をしているかとも思うが、四、五歳まで乳離れしない子も居ると言うし、明石君から離れたことを思えば姫君を宥める為に乳臭い女は必要だったのだろう。

御袴着は(姫の三歳の御祝いは)、何ばかりわざと思しいそぐことはなけれど(何も特に気構えて準備する事は無かったが)、\*けしきことなり(内大臣家の儀式であってみれば、その賑わいは大変なものでした)。\*「けしき」は<様子>で「殊也」は<格別だ>で、「けしきことなり」は逐語なら<様子は格別だ>となる。何の準備もしていないのに御祝いの<様子は格別だ>では意味不明だ。で、その「殊也」の描写が以下に続くので、それを先取りして補語する。

御しつらひ(御飾り付けが)、雛遊びの(ひひなあそびの、雛人形の)心地してをかしう見ゆ(お供えのようで楽しそうでした)。参りたまへる(御祝いに参列なさった)客人ども(まらうとども、

お客様たちは)、ただ明け暮れのけぢめしなければ(常日頃からこの日に限らず内大臣家に御用伺いに参っていた高官たちだったので)、あながちに目も立たざりき(特には目立ちませんでした)。

ただ、姫君の\*襷引き結ひたまへる胸つきぞ(袴の腰紐をずり落ちないように幼児らしく肩へタスキ掛けにした胸元に)、うつくしげさ添ひて見えたまひつる(可愛さが引き立って見えて御出ででした)。 \*「たすきひきゆふむなつき」は袴着の様式だろうとは思っても、全く理解できなかった。様式については「風俗博物館」のWebサイトを先ず頼ることにしている。しかし、この「薄雲」巻の「袴着」については本家とは別の、「源氏の部屋」(eva.genji.cc)サイトの「風俗博物館を10倍楽しむ!」コーナーの「明石の姫君の袴着」ページに詳しい解説があり、正に袴の腰紐を襷掛けしている人形の写真までアップされていて、圧倒的な説得力でした。尤も「袴着」で検索すれば、このページはすぐヒットする。

## [第六段 歳末の大堰の明石]

大堰には(大堰にはこの祝言の様子が知らされて)、尽きせず恋しきにも(明石君は姫をどこまでも恋しく思えば)、身の\*おこたりを嘆き(自身が祝って遣れなかったことを嘆いて、)\*添へたり(思わずこうつぶやきました)。さこそ言ひ\*しか(「私こそが祝って遣りたかった。)、 \*「おこたり」は<怠ること、行き届かなさ、あやまち>と<運の無さ、宿命の劣り>とがあるが、此处は祝言模様の知らせを受けた文脈から<怠ったこと→祝ってやれなかった事>と解す。 \*「添ふ」は<加える、増す>や<準える、並べる>があるが、何より此处にはその対象が示されて居ない。文意から対象を探れば、此处の「添へたり」は「添へ言(そへごと、問わず語り)」「かく言ひたり」の切迫文形、と読みたい。 \*「しか」は古語辞典に<過去の助動詞「き」の仮定形で、その中止法による願望表現>とある。例えば、「さこそ言ひしか、いかにぞうれしかりけめ(私が姫をそのように言ほいで遣れたなら、どんなにか嬉しかった事だろう)」の中止といったところか。

尼君もいとど\*涙もろなれど(尼君も娘君に同情してより一層涙を多く流したが)、かくもてかしづかれたまふを聞くはうれしかりけり(孫姫が二条院でこのように大事にされていらっしやるのを聞くのは嬉しかったのです)。 \*「涙もろ」は「涙諸」で<同情の涙>か<多くの涙>だろう。多く言う「涙脆い」の名詞形かもしれないが、「いとど」との相性は<泣きやすい>より<多く泣いた>の方が良い。

何ごとをか(でも盛大なお祝いだったと聞いては、この上どんなお祝いを贈れば良いのか分からずに)、なかなか訪らひきこえたまはむ(明石君は姫君には特別な御するしは差し上げ申しなさいませんでした。)、ただ御方の人びとに(ただ姫君に御付きの女房たちに)、乳母よりはじめて(乳母をはじめてとして)、世になき色あひを思ひいそぎてぞ(見事な色合いの正月晴れ着を選び揃えて姫君の周りを華やかに飾るように)、\*贈りきこえたまひける(贈り申しなさったのです)。 \*注に<正月用の装束。明石に敬語がついている。>とある。

「\*待ち遠ならむも(若君を譲り受けた後に途絶えて待ち遠しくなるのも)、いとどさればよ(ますます用無しということか)」と思はむに(と明石君が思うだろうことが)、いとほしければ(気の毒なので)、年の内に忍びて渡りたまへり(年末の手当てを十分に施そうと間を置かず光君は内々で大堰山荘を再訪なさいました)。 \*注に<以下「いとどさればよ」まで、源氏の心中。明石の心中を思う。歳暮、源氏、大堰山荘を訪問を語る。しかしその描写なし。>とある。

いとどさびしき住まひに(冬の寒さにますます寂しくなる屋敷に)、明け暮れのかしづきぐさをさへ離れきこえて(明け暮れに世話する種さえ手放し申して)、思ふらむことの心苦しければ(子を思う明石君の母心が労しくて)、御文なども絶え間なく遣はず(手紙や見舞品を絶え間なく光君は大堰に遣わしなさいます)。

女君も(二条院夫人も明石君を)、今はことに\*怨じきこえたまはず(今は特に妬みに思い申しなさらず)、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり(可愛い姫君に罪は無いと思ひ申しなさいました)。 \*注に<紫の上が明石の君を。「きこえ」という謙讓語が、次の「罪ゆるしきこえたまへり」にも使用されている。明石の君の地位・待遇の向上が窺われる。>とある。言い回しの語句の対照として、紫君の「怨じきこえ」たのが明石君なのは分かるが、「罪ゆるしきこえ」る相手は光君に思えてならない。ただ、そうすると、これはそういう回りくどい文意ではなく、紫君は実際には姫君に「聞こえ」るように、実母たる明石君への恨み言ではなく、姫君自身に<可愛いことね>と言った、という言い方にも見えてくる。